

特集

知的障害と発達研究

特集にあたって

「原点」に立ち戻る

黒田 吉孝

くろだ よしたか
滋賀大学、本誌編集委員

知的障害は発達障害の代表的な障害であり、およそ3%の出現率とされている。研究の歴史も最も古く何世紀もの時間を辿ることができる。最近では、発達障害と言えは、「軽度」発達障害のイメージが強くなっているが、筆者は、発達障害の研究の基本は、知的障害にあると考えている。本誌発刊当時（1973年）は、知的障害児の発達をどうとらえ、いかに研究を行うべきか、あるいは、子どもと教師の具体的な関係から発達の事実やそれを保障する実践内容をどう創り出すか等、ホットな議論が展開されていた。その背景には、義務教育の完全実施とそれに深く関連した知的障害に対する新たな発達理論の創造という、社会的な期待があった。学会等でも、知的障害研究の原理問題について議論が行われていた。残念ながら、今日、知的障害について、かつてのような議論や研究が少なくなってきた。研究がまとまりをもち成果が十分に得られたことによって一段落したのであれば幸いであるが、この点に関する議論は不十分であると、筆者は考える。

そこで、今回の特集では、「知的障害と発達研究」と冠し、知的障害研究の「原点」に立ち戻り、また、現在の研究状況に一石を投じようとした。

知的障害については、「発達期に起こり、知的機能の発達に明らかな遅れがあり、適応行動の困難性を伴う状態」（文部科学省、2002）が、一般的な定義とされている。「発達期」、「知的発達の遅れ」、「適応行動」の三つがセットにな

っている。この定義にしたがうならば、知的障害とは何かと問われた場合、この三つの要件を視野に入れての説明が必要になってくる。本特集名との関係では、知的障害をいかに定義するか、知的な遅れをいかにとらえ理解を深めるか、一人ひとりの発達や障害にふさわしい社会的な環境の設定とその人らしい生活をどのように作り出せるのか等が課題になってくる。

これらの課題に対し、清水論文ではアメリカを中心に知的障害の定義・概念がどのように議論され現在に至っているのが、また、その社会的背景にはどのようなものがあつたのか、検討が行われている。前川論文、白石論文では、知的機能の遅れの理解と評価について、それぞれの立場から、最近の認知心理学や神経心理学を踏まえての機能的アセスメントの動向と知的障害研究における意義、田中昌人氏の発達の「階層一段階理論」の立場からの知的障害への研究の方法と具体的な事実を踏まえての意義が論じられている。菅野論文、小崎他論文では、ライフコースの観点から、とくに、成人期と壮年期の知的障害の人の生活を豊かにする条件や課題について、それぞれ、基礎的な資料と臨床的な資料が提供され、検討が行われている。その他、ヴィゴツキーの知的障害研究を今日の視点からどう理解し研究の発展につなげるか、健常児の発達研究の動向から学ぶべき点は何か、医学からみた生活等の問題について、それぞれ論文を掲載することができた。今後の知的障害研究の発展に寄与することができれば幸甚である。